儀をなさしめた。

而して日機は其後も連日飛來し、或は偵察に或は爆擊に其意を恣にせしが之れに對する我側の應戰は砲力の微弱なると技術未熟の前述の如く一向に効を奏しなかつた、二月二十六日の如き日機の爆彈投下に對し高射砲を發射せる際一門は取扱不良のため故障を生して動かなくなり他の一門は砲身炸裂して兵士二名負傷した。

右の記事中我軍の飛行機數其他に關しては誤まつた點があるが支那側の事に關しては坊間流布の小說的戰記と異なり參考に資すべきものが多いと認めらるる。

七、二月二十六日杭州飛行場の空襲

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

前記「抗日戰記」にも見ゆるが如く支那空軍は十九日以後其全勢力を杭州に集中し以て我軍に對し敵對行動に出つべき準備を爲しつゝあつた。

十九日には南京に在りし廣東空軍は杭州に移動し、翌廿日午前には蚌埠に在りし南京空軍を南京に招致し次て同日午后航空署長黃秉衡は自ら十六基を率ゐ杭州に移動した。此の敵空軍の計畫を偵知した我海軍航空隊は敵の未だ來襲せざるに先ち之を擊破するの目的を以て二十六日早朝杭州飛行場の空襲を決行することとなつた。空襲實施の前日（二十五日）驅逐艦澤風（艦長少佐男爵伊集院松治）は飛行機掩護艦として杭州灣乍浦砲臺附近にまた

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第一航空戰隊の出動

鳳翔（艦長大佐堀江六郎）及峰風（艦長少佐河西虎三）は大甲山南方に進出して翌日の壯途に備ふるところがあつた。廿六日は愈空襲決行の日である、第一航空戰隊司令官（少將子爵加藤隆義）は軍艦加賀（艦長大佐大西次郎）に座乘し驅逐艦矢風（艦長少佐牟田口格郎）を率ゐ「ポンハム」燈臺南方杭州への距離約百二十浬の地點に進出した。

空襲部隊の編制

當日の空襲部隊の編制は次の如くであつた

空襲部隊指揮官　海軍大尉　小田原俊彦

攻擊機隊加賀（九基）指揮官　右仝

第一小隊長　右仝

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一番機　右仝（操）

海軍大尉川口益（偵）

一等航空兵瀧澤賢三郎（電、射）

二番機　三等航空兵曹　阿部豐後（操）

一等航空兵曹　丹羽富三（偵）

一等航空兵　青木秀信（電、射）

三番機　一等航空兵　熊倉隆平（操）

二等航空兵曹　佐藤　熙（偵）

三等航空兵曹　大須賀誠助（電、射）

第二小隊長　海軍大尉　佐多直大

一番機　右仝（操）

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

8. 3　10.

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

海軍大尉　内藤雄（偵）

三等航空兵曹　酒匂英男（電、射）

二番機　二等航空兵曹　古賀　一（操）

三等航空兵曹　中島田光雄（偵）

右仝　關井　清（電、射）

三番機　一等航空兵　日高實義（操）

右仝　西川吉白（偵）

右仝　泉　隆義（電、射）

第三小隊長　海軍大尉　安延多計夫

一番機　右仝（操）

海軍大尉　大塚秀治（偵）

軍令部戦史編纂原稿乙（花崎納）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

三等航空兵曹　依田　健（電、射）

二番機　二等航空兵曹　瀧本文明（操）

一等航空兵曹　鶴岡運平（偵）

一等航空兵　森榮太郎（電、射）

三番機　三等航空兵曹　岩上六郎（操）

二等航空兵曹　道内　永（偵）

一等航空兵　木村彌一郎（電、射）

援護隊（鳳翔戰闘機六基）指揮官海軍大尉　所茂八郎

第四小隊長　右仝

一番機　右仝

二番機　二等航空兵曹　加藤敬二郎

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

(8. 7　10.)

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

三番機　三等航空兵曹　齋藤武雄

第五小隊長　海軍大尉　渥美信一

一番機　右仝

二番機　三等航空兵曹　井上義雄

三番機　右仝　小林四一郎

空襲部隊が出發に際して航空戰隊司令官より受けた訓令の要旨は「杭州附近筧橋飛行場に在る敵機に對し徹底的に之を破壞すべし、然し乍ら杭州市街民屋等に對しては毀害を加ふる勿れ」と云ふのであつた。

四邊未たほの暗き午前五時十分先に加賀艦上に在つた小田原大尉の指揮する攻擊機隊九基は爆音勇ましく出發し

軍令部戰史編纂原稿甲乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

出發

鳳翔上空に飛來した、鳳翔に在つた所大尉の指揮する援護隊六基は午前五時三十五分發艦して攻擊機隊と合同し二百六十二度の針路を以て一路西方に向つた、此時視界漸次不良となり水平線の視認は全く不可能となり飛行に困難を感する程となつた、午前六時頃に至つて夜漸く明け、次で澤風を認めその上空に於て約十分間待合せ全空襲部隊を合同して陣形を整へた、此時日は東海に出で整々の銀翼朝日に輝いて何とも言へない光景であつた、かくて空襲部隊は午前六時三十五分郭浦の沖を通過し午前七時五分筧橋飛行場上空に達した。このとき地上を偵察すると飛行場には格納庫其他諸設備の外敵機五基が地上

筧橋に達す

防衛研究所戦史部蔵原稿乙（花崎誌）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

空中戰

に在るのみで豫期したよりも敵機の數が少ない樣に思はれたが然し發見したものから先づ攻擊を初め攻擊機隊の爆擊を開始した。第一小隊（小田原隊）は先づ數回飛行場の上空を航過して格納庫に最初の爆彈を投すれは第二小隊（佐多隊）及第三小隊（安延隊）は相次で編隊爆擊を續行した、このとき第三小隊の二番機（瀧本機）は殘彈一發を生したので直に列を離れ降下爆擊を實施したのであつた。時に午前七時二十五分であつた、此爆擊の結果茲に笹橋飛行場設備を完全に爆破し五基の敵飛行機を破壞したのであつた。然るに爆擊中午前七時十五分頃、敵單葉戰鬪機一基空中に顯はれ來り我第二第三小隊と交

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

戰した（七時二十分）、次で敵復葉戰鬪機亦來り第二小隊第三小隊と交戰した。

午前七時二十五分第一小隊は敵單葉戰鬪機と出會し反航一回同航一回の交戰を行ひたるところ我戰鬪機隊第五小隊（渥美隊）は此敵機を捕促急追し攻擊を加へ、先つ施回銃手を斃し次で火災を發せしめた、同機は我追擊を逃れんとして他の飛行場に達し遂に辛ふして着陸したが左九十度に機首を振り機体を大破し人員は遂に其姿を機外に顯はさなかつた、この第五小隊が思はずも敵機を追擊して達したのは新飛行場（筧橋の東南方七浬蒲家村）であつて其處に約十二機の敵機を發見したのである、內二

新飛行場發見

軍令部戰史編纂原稿乙（花崎納）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敵機撃落

機はプロペラーを廻轉しつゝ今や當に離陸せんとする刹那であつた、そこで第五小隊は直に急降下してその二機に掃射を加へ、内一機を確實に破壊した。

七時三十分第一小隊（小田原隊）は再び他の復葉戰鬪機二機と近距離に遭遇したが敵機は攻勢に出でず西方に遺走した、第四小隊（所隊）は敵複葉戰鬪機一機と交戰し同航反航各一回の交戰を行た後更に反航射擊を加へたる際我射彈は敵機の翼親骨に命中し遂に緩除なる「スピン」にて杭州南東方錢塘江南岸に墜落するのを見た。また第四小隊三番機（齋藤機）は敵の單葉戰鬪機と交戰し後上方より連續攻擊約一分にして敵機は遂に筧橋北東約一浬

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の地點に垂直に墜落し粉碎した。午前七時三十五分第二小隊二番機（瀧本機）は曩に下降爆擊を瘁ひたる際、地上よりの射擊により水冷却器に敵彈を受けし爲め故障を起し單獨集合地點に向ふ途中發動機燒損停止し遂に錢塘江上に不時着するの已を得ざるに至つた幸にして乘員は後驅逐艦澤風に救助せられた、斯くて小田原大尉は全部（內第二小隊一番機は二番機の救助に從事す）の隊を率ゐ午前八時四十五分任務をへて無事上海基地に到着した。

午前の空襲により渥美隊が發見した飛行場は從來未知のものであつた、之に對しては早刻猶餘すべからずとなし

午后の爆擊

平林（長元）大尉の率ゐる攻擊機三機

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

小山（茂）大尉の率ゆる攻撃機三機
戰鬪機三機
戰鬪機三機

の十二機は杭州附近新飛行場の爆撃を命せられ午后一時三十分浦家村飛行場上空に至り小型機一機を認め直に敵機並に飛行場設備に對し爆撃を行ひ之を全く破壊したのであつた、然るに午前地上に在つた多數の敵機は我が空襲に先つて南京及蚌埠に逃走し去つた跡で長蛇を逸したのは殘念であつた。本戰鬪に依り敵機三台は空中戰によりて撃落し其他地上に在りし者に對しては降下射撃並に爆撃によつて少くも九機を破壊した、只他の飛行機十八

軍令部戰史編纂原稿乙（花崎納）

2663

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

機は逃走したものと思はれた、杭州に前進し來りし敵機部隊及敵の飛行基地は完全に之を破壞し敵をして全く上海方面上空に活動するの意志を斷たしめ之を封することが出來たことは爾後の作戰に多大の效果を齎らしたものであつたのみならず此の一擊は以て敵空軍に至大の精神的打擊を與へしめ十九路軍の志氣にも影響し敵をして遂に戰意を失してしまつたのである。從つて江南戰區の制空權を確實に我軍によつて把握することが出來た、其の戰略的效果は實に甚大なるものがあつたと言はなければならない。

制空權の掌握

我軍に於ける損害は加賀第二小隊の二番機（瀧本機）冷

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

却機を破壊せられ爲めに錢塘江口に着水したるとゝ之を救助せんが爲め一番機（安延機）が澤風に通報の爲着水したる爲二機を失つたのみであるが搭乘員は孰れも救助せられた。

長官の表彰

本戰鬪に於ける功績に對し第三艦隊司令長官は左記の表彰を行つた。

小田原大尉ノ指揮スル第一航空戰隊飛行機隊ハ二月二十六日早朝敵飛行機ノ本據タル杭州附近飛行場ヲ奇襲シ敵飛行機九基ヲ擊碎且殘敵ヲ作戰區域外ニ一掃シ以テ概ネ當方面ノ制空權ヲ獲得シタリ

此ノ戰鬪ニ於テ敵飛行機ノ反擊ニ對シ戰鬪機隊ハ善戰

軍令部戰史編纂原稿第乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

終始敵ヲ壓迫力戰敵機三基ヲ擊墜シ能ク掩護ノ任ヲ全クシ帝國海軍航空威力ノ眞價ヲ發揮シタリ茲ニ其ノ功績ヲ表彰ス

支那側の戰記を一覽すれば一增此間の事情と我空襲部隊の功績を明瞭にすることが出來る。

支那戰記

二月二十六日杭州の空中戰

杭州戰は我側の飛行機二十五基參加したが中七基は廣東より應援に飛來せるものであつた、卽ち昨年の九一八事件以來日本軍の侵略あるべきを豫想し中央航空當局は必要に應し出動共に國難に當る樣電請して居たのであるが上海事變の起るに及び二月五日の

軍令部戰史編纂資料第乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

空軍の出動に際し重ねて抗日戰に參加方電報した、之に對し廣東空軍司令張惠長は第二隊の丁紀徐等に七基の飛行機を率ひて出發せしむる旨返電あり、同十日同地出發、十一日長沙着十五日南昌着十六日午後一時南京に到着した。

是れより先航空當局は各地に於ける共匪軍討伐に空軍の活動を必要とする關係上之を抗日戰に使用するは少からず困難を感する處なりしも非常な無理をして三十余基を引拔き少數を南京の防空用として餘の二十五基は之を蘇州に集中せんとせしも全地は前述の如く我側にとり頗る不利の形勢にありしを以て杭

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

(8. 3 10.)

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

州に本據を置くこととなり、二月十九日より三日間に亘り航空署長親しく之を率ゐ次の如き編成により出發越杭した。

飛機ノ種類	機數		備考
ワール	三	吳汝、流金、金彬偉、陳信源	廣東ヨリ來ル
ユンケル	一	丁紀徐	仝
コルセー	二	曾澤棠、陶佐德、容章炳	仝
ユンケル（大型）	一	黃秉衡、田曦	中央機
コルセー	七	趙甫明、蕭榮萱、蔣志高、郭漢等	仝
ライン	一	謝葬	廣東ヨリ來ル
リンカ	一	蔣孝棠	中央機

軍令部戰史編纂原稿紙乙（花崎納）

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ボーイング	一	ショート	中央機
コルセー	三	龍祚炎、崔滄石	仝
ユンケル	一	石邦藩	仝
ユンケル	四	葛白氷、秦宗藩	仝

以上の二十五基は前後して杭州筧橋飛行場に到着した處同場は工事尚完成せず多數の飛行機を收容すること不能なりしにより十支里南京の喬司地方に竪二千米幅六七百米の廣さの空地あるを發見し急造の飛行場となすことに決定した然るに二十日晩陸軍部長何應欽より次の如き電報

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一本日の上海戰況、午前日軍四、五千は、タンク及飛行機各二十餘を以て八字橋、江灣、廟行の線に攻擊を加へしも我軍に擊退せられ飛行機一台は射落された兄（黃署長を指す）は杭州の事宜終らば至急歸京し、全航空事務を處理し杭州の飛行隊は別に之を任命して之を統率され度い一

と來り次いで翌二十一日には十九路軍蔣總指揮官より次の電報

一我機は來滬の上次の任務につく可し

(一)黎平（平涼）路及高橋沙兩飛行場の敵飛行機の爆擊

(8. 3 10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

(二)我側の防空並びに敵機の我陣地に對する活動の抑制

(三)誤解を避くる爲飛來の際は豫め通知のこと

(四)租界上空の飛行を避くること」

を受取つた。

されど連日の濃霧は依然として晴れず飛行不能の狀態にありしが二十二日に至り霧稍々晴れたるにより九基先つ出發上海に向つたが霧深くして見通きかず一台の敵機に遭遇することなく後還した。

二十三日降雪のため飛行不可能でただ飛行場上空に飛行して警戒を嚴にして居たが前日「ショート」が

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

蘇州で遭難したことを知つた次いで何部長の電として

「蘇州上海の兩飛行場は正に敵軍に破壞されたが杭州も亦恐らく之を免れまい、就ては左の諸項に努めて注意を拂はれ度し

(1) 戰鬪に不利な各機及「スコスク」機は蚌埠に回航すること

(2) 上海杭州間の諸重要地點は常に監視を怠らざること

(3) 駐軍各部隊に山砲野砲を高射砲に轉用する樣協議すること

軍令部戰史編纂資料 稿紙乙（花崎納）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

(4) 天候回復せば戰線に赴くこと」

を航空署より轉電し來つた。

二十四日又もや何部長電として蔣委員長の命により戰略を變更し全部飛行機を蚌埠に移し以て日機との戰鬪による重大犧牲を免れよとの命令が轉電して來た。

翌二十五日午前又もや何部長より「スコスク」機は即日蚌埠に送る樣電あり。且曹副署長よりも上海に於ける戰鬪終了せば直ちに蚌埠に飛來する樣命令し來つた。

併し黃署長は杭州に在つて上海方面の情形を見極

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

めたので何部長及蔣委員長に對し「蚌埠に飛ぶのは安全なるかも知れざれども作戰上よりすれば餘りに距離遠き故今暫く此の地に在て狀況を續察し機を見て赴蚌し度い」と返電する處あつた。

然るに仝日に至り航空署より日本の航空母艦一隻は何れかへ出動したるにより注意せよとの情報に接し萬一に備へる爲二十五日戰鬪機全部をは喬司の新飛行場に移し以て敵の目を避くることにし此事を曹副署長に打電報告した。

果せる哉二十六日午前六時三十分、我機か喬司飛行場に於て出動準備をなせる際忽然として日機十

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

五台（爆撃機六驅逐機九）東南方の上空より筧橋飛行場に向ひ飛來せるを認めしを以て黄署長は喬司機場に到りて各機を指揮して之に應戰のことと、なつた、即我石隊長は七號「ユンケル」機に搭乘して筧橋上空に至りしが之を見た敵の爆撃機三基、驅逐機五基は上空より疾驅して我に猛撃を加へ銃彈雨の如く飛來した。

之が爲石隊長の機は包圍の形勢となり激戰幾何もなくして左臂に負傷したので右手を以て操縱し且機關銃で應戰しつゝありしも「エンヂン」に故障を生ぜし爲遂に下降着陸するの已むなきに至つた、

(8. 3　10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

他の我「コルセー」機等は各々近くの敵機と戰を交へ趙甫明の如き三回に亘り敵軍中に突擊を試みたが敵機三台之に應援に向ひ爲に趙は胸部及咽喉に三彈を受けしもひるまず應戰に努め圍を破つて無事歸還した。

丁紀徐は敵の三機が筧橋上空に到着したるを見「ワール」機三基を指揮して應戰し敵機の連絡を絶ちて後各個別に之を擊破した、此時敵機は筧橋飛行場が已に破壞され終れるに斯くも喬司飛行場に於ける優勢なる我機に遭遇せしにより驚きの余り軀を轉じ倉皇として逃れ去つたので我機は之を追

平成三年戰史叢書編纂資料（花崎納）

(8. 3 10.)

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

撃し稍々久しくして始めて歸來した。

此の戰の結果敵機一台は射落され三、四人の死者を生じた我側に於ては石隊長及趙甫明龍榮萱の三名負傷せしのみにて喬司飛行場は何等の損害も蒙らずして濟んだ、然れども敵機の再襲來を恐れた爲黃署長は卽刻命令して全部の機を南京に歸らしめたが、之は蚌頭に行く準備であつた。處が果して午后になつて敵機十二基は又もや喬司飛行場に飛來し爆彈投下をなした、黃署長は翌日離杭南京に歸り一方負傷者の手當をなした結果趙甫明は經過不良で六月十八日死亡し石邦藩は敵の「ダムダ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ム」彈により受けた左手の出血止まず之を切斷するの已むなきに至り龍榮萱のみは幾何ならずして治癒した（淞々「支那空軍抗日戰記」）

九、戰線射爆擊

海軍航空部隊が陸戰隊並に陸軍の地上部隊と策應して行つた爆擊は作戰上最も重要な役割を演した、而して連日の攻擊動作は一々之を擧ぐるに遑ないから茲には局面的な記錄を避けて概括的に之を述べて見やう。

爆擊目標

爆擊の目標は㈠敵前線㈡敵豫備隊㈢敵砲台㈣敵飛行基地㈤敵增援軍を阻止する爲めの交通線破壞等であつた、敵の前線陣地は閘北、江灣鎭、廟行鎭、吳淞鎭方面が重な

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp